

司会 それではディスカッションを始めます。

〇〇 著作権に関してお話をお聞きしたい。

丸山 例えばちらしやポスターに関しては、持ち込まれた方に、このような形で扱っていいですかとお聞きして了解を得られたらスタートします。難しいところですが、著作権処理をきちんとやろうと思うと手がつけられなくなってしまうというのが現状です。著作権を無視するわけではないのですが、技術的なこととしてアプローチするのであれば、何ができるのかなというところでチャレンジしてみてもいいのではないかと考えています。本人の許諾を無視するような活動はいけません、その上で、書面を取り交わすというシステムはできてはいないのですが、著作権も考えつつ、でも、それに縛られることなくチャレンジできることはチャレンジするというところでとらえています。

〇〇 例えば SuperOPAC で扱われているものの中に著作権で問題になるようなものはありませんか？

丸山 SuperOPAC で扱っているものも実験ということで使っておりまして、許諾が得られたものに限定するようにしています。中でも新聞や雑誌の見出しに関しては高裁で著作物性はないという判断が出ていましたので、それに基づいてやっています。目録データとして何新聞に出たとか、何という雑誌に出たということに関してはピックアップして登録していますが、見出し語に関しては特に許諾を得るということはありません。

著作権をきちんと考えなければいけないということはもちろんですが、今までの著作権はどちらかといえば保護ということに重点がおかれています。それは決して悪いことではありませんが、むしろこれからは使うため、使えるようにするための著作権ということを考えていただけるといいのではないかと考えています。竹中大臣の放送と通信を考える懇話会でも、これからデジタル化される放送の中で著作権をどう扱っていくかということがテーマになっていました。今後は国としても、使える著作権の使用とはどのようなものかということを考えていただけるといいのではないかと期待しています。

古賀 国立情報学研究所の古賀です。

2月に機会がありまして情報創造館を訪問させていただきまして、そのときはありがとうございました。

今日のお話で地域のデジタルアーカイブを構築するにあたって、専門技術にたけた人が欲しいといいますか、スキルを持った人が必要だという、人の問題で何かお考えがあれば、お聞かせいただければと思います。

丸山 人材の話については今日ほとんどしませんでした。

コンピュータを扱ったり、イメージスキャナーやデジタルカメラを使うというのは、やっているうちに覚えてしまうものです。それより必要なのは、山中湖情報創造館でも足りないところなのですが、図書館から外に出て情報を集めてくるということ、そのような資質を持った人が求められます。例えば買い物をしている最中でも、スーパーの掲示板にこんなイベントのちらしが貼ってあったよということに注意をもてる方です。町を歩いても、こんな新しい看板ができていたということに注意を、関心を向けられるかた。ともすると、そこにあるだけということで見過ごしてしまうのですが。デジタル機器を扱う技能はそのあとからついてきますので。自衛隊にいた関係で言えば、斥候（偵察部隊）として敵の情報を集めてくるという役割を担う人たちがいて、そのときにどのような変化を見に来るのか、何を伝えるのか、見てきたことだけを伝える、あるいは自分の感想を伝える、情報を集めるというノウハウが求められるような気がします。民間に転用するには別のスキルが必要なのですが、そのような情報を集めてくる資質を持った人をいかに育てるかというのはテーマになります。

毛塚 全史料協関東部会の毛塚と申します。

地域の情報として、ちらし、フライヤー、ポスター以下のさまざまな民の情報を収集するという活動についてお話がありました。これは指定管理者として業務を受ける中できちんと条項の中に盛り込まれている部分なのか、あるいはデジ研が受託するにあたってオプションの部分で、団体が変わったら変わってしまう可能性があるのか、いかがでしょうか？

丸山 指定管理者というのは民営化ということと間違えられてしまうのです。指定管理者制度というのは民営化と大きく異なっておりまして、あくまでも行政の公共サービスをいかに効率よく民間団体がやってくれるかということで設定されます。そのときに行政の側からこのような仕事をしてほしいという仕様書、要求水準が出てきます。

山中湖の場合も、具体的な文言というよりは漠としたものですが、山中湖の情報を収集して、それを発信できる機能を持ってほしいということがうたわれています。それを具体的な形で実践するのは私たちがどう展開するかなのですが、図書館として書店流通で流れている本を本棚に並べて市民に提供するのではなくて、山中湖の情報を集めて情報創造館から発信してほしい、そのような機能を持ってほしいと設置自治体の教育委員会から要望として上がってきています。それを具体的に展開したということですが、正直言うと、まだ全然追いついていない、足りないと思っはいるのですが。

毛塚 ありがとうございます。なぜ全史料協を名乗ったかといいますと、ライブラリーのジャンルで、地域あるいは民の資料、将来のアーカイブをここまで保護してもらえると、公立の文書館、公文書館は自分たちの行政資料、公文書などに集中できるからです。今、

どこまでそれぞれの地域の事情に応じて考えなければいけないか、しかもデジタルの時代になって答がなかった部分。これは指定管理者制度が導入されるのと同時に、行政がどこまで地域の資料に対して責任を持つかという話にもつながってくるというように、見越したうえでの質問でしたので、意地が悪かったかと思いますが、ありがとうございました。

柳 日立の柳と申します。

多種類情報データベースに興味があります。いろいろな情報を入れて関連するものを引っ張ってきて提供するという考え方はとても役に立つと思います。SuperOPACで実験されているということですが、データの加工はどのような形で行われているのでしょうか。

丸山 どこまで話せるかなということはありません。

須玉オープンミュージアムを作ったときに、ファイルメーカーというソフトを使いました。FileMaker Pro6 アンリミテッドというソフトで動いています。ファイルメーカー社では、現在7、8になったのですが、6から7、8への移行が大幅に変更になってしまいました。バックで動いているのはファイルメーカーというデータベースソフト、それからアンリミテッドの中にあるウェブ共有の機能、ウェブコンパニオンという機能があって、ファイルメーカーのデータをウェブ上で公開できる機能です。それをベースとして使っています。

データベース構造としてリレーショナル型のデータベースであれば、どのようなものでも対応できるように考えています。できてしまうと非常に簡単でした。

従来のデータベースはご存じだと思いますが、ファイルメーカーでもアクセスでも同じで、例えば[書誌]としますと何件も扱えるけれども全部同じ項目が並んでいますよということになります。同じように[場所のデータ]ですと別の項目立てがあつて、今まではデータベースの固まりごとに検索しなければならなかったのですが、これを一つの構造の中でいっぺんにできるように作ってみました。それをすることによってデータとデータの相互関連が非常につけやすくなりました。

例えば一つのデータから関連づけていくと、従来のリレーショナル・データベースだとつなぎの線がたくさん出てくるのです。1個増えるとまたそこにつなぎの線が増えて、しまいにはリレーショナルが收拾つかなくなってしまいます。それを何とか解決したいと思って構造を編み出しました。この形はファイルメーカー以外の、オラクルから、アクセスでもSQLでも、リレーショナルのデータベースであればおそらく使えるであろう構造をとっています。たまたま使い慣れていたファイルメーカーでやりましたが。

できてみればシンプルな形でしたが、どんなリレーショナル型のデータベースを使ってもできる形になっていますので、別の機会にもう少し大規模なものを作れたらと思っています。飛行機でいえば、大型の旅客機を目指しながら、今作っているのはライト兄弟の飛行機かなというところです。

野中 早稲田大学で小林是綱先生の図書館学を受講している野中と申します。今日は貴重なお話をありがとうございました。

情報をアーカイブしていくにしたがって、どんどん情報が増えて、利用する側として自分の欲しい情報を探す技術が求められてくると思いますが、図書館のレファレンスサービスなどで具体的になにか行っていらっしゃいますか？

丸山 レファレンスサービスでいうと、利用者のかたからご質問をいただいて、それにふさわしい資料を探すということになりますが、図書館の中では OPAC という検索機器を使って調べていくのが従来型のやり方です。図書館で使っている OPAC は、あらかじめ行政が導入したシステムなので、指定管理者が動かすことはできないのですが、もし次に何か提案をすることができたら、SuperOPAC のような考え方をベースにしたシステムをやれたらと思っています。

情報を検索するテクニックについて、松岡正剛さんがおっしゃっておりますが、「注意のカーソル」をどのように対象に向けていくのかということが、とても重要な要素になると。

例えばホームページを見て気になるキーワードがあったら、今度はそのキーワードで検索し直してみる。それを何回か繰り返すと自分の欲しかった情報にたどり着けることがあります。ウェブページならそれが可能ですし、ウェブの中のウィキペディアという参加型の百科事典では、キーワードをクリックすると関連するものにすぐ飛んでいくようなものがあります。データベースではアクセスを使ってもファイルメーカーを使っても少し難しくても、そのような関心を向けたときに結果が出てくるというシステムを片方で作る。そして利用する側はその検索結果だけに満足するのではなく、そこから自分の関心を持ったことをもう 1 回検索してみる、そのような繰り返しができる環境を作れたらいいと思っています。

個人のスキルももちろんですが、システムもそれに対応できるものを作っていく。大切なのは関心や注意を、自分でどのように持っているかということをいつも認識していることだと思います。

司会 私から一つ質問があります。

デジタル化のお話を様々な角度からお聞きすることができました。そこで原物について、その管理や保存についてはどのようにお考えでしょうか？

丸山 山中湖創造館ということでお話いたします。

開館時に寄贈いただいた本の中の貴重書、特に山岳資料、富士山資料に、これからは入手不可能であろうと思われる資料があり、鍵のかかったガラスケースの中に入っています。図書館という場所は資料を保存するという点に関してはあまりキャパシティがないの

ですね。3年目に入り、初期に貸していた逐次刊行物の保存期限が過ぎました。それらは廃棄処理をした上で、利用者の方にお持ち帰りいただくことにして、それはそれで評判がいいのですが、このように図書館自身が保存すべき資料とそうでない、ある意味新陳代謝する部分とがあります。それを見定めるのが図書館司書の仕事であると、本を選ぶのが司書の専門技能ではなくて、捨てるほうが専門技能なのだということも言われております。

山中湖創造館の場合は、原物の資料を保存する文書館的なスペースはありません。防火の閉架書庫はあるのですが湿度管理をしているわけではありません。原物の保存という意味では正直なところ十分ではないのが現状です。今後は[ちらし]などをできるだけ多く扱っていきたいので、山中湖村に対して保存スペースを要求していくべきなのかとも思っております。

司会 時間がまいりましたが、先生、最後にお話しいただくことはありますか。

丸山 今日お話ししようか迷って結局やめたのですが、情報化ということについて私自身きちんと把握しておいたほうがよいのかなといつも思っています。原物をデジタル化する、そもそもなぜ情報化する必要があるのかということでは、原物は一つしかない場合があるし、動かしてしまったら終わりだということもあります。それに対して情報化されたものは編集可能なのです。このあたりをきちんと把握しておく、情報化の意味がよく分かってくるのではないかと思います。

例えば情報化されたもので何度もシュミレーションを行うことがあります。山中湖村の地図の中でコンビニエンスストアはどこにあるかなと地図の上にピンを刺しておけばいいのです。これを現実の社会でやろうとすると、コンビニエンス以外のものを全部焼き払うのか、それはできないので情報化することによって不可能な編集方法も可能にしていく。

そう考えると目録カードやOPACの情報化だけではなくて、たとえば食玩というおもちゃがありますね、あれも情報化の一つの形なのだと思います。本物の飛行機で遊ぶことはできないのですが、ミニチュア化された形だけは持っている。実は子供たちが何とかごっこをしているあの遊びは、情報化されたフィギュアといいますか、対象を何度もシュミレーションするというものの体験を遊びの中でやっています。本物はいじることができないけれど、情報化されたものであればどのようなシュミレーションも試行錯誤でやることができる。これが情報化ということの重要なポイントなのかなと考えています。

司会 それではこれで終了いたします。どうも有り難うございました。